

# 吉藏の成仏不成仏觀(十)

末 光 愛 正

## 序

既に「吉藏の成仏不成仏觀<sup>(1)</sup>」と題して、今まで九回、吉藏(五四九―六二三)の思想を述べて来た。その要点は、①五千の増上慢と決定の増上慢は不成仏であるが、②これ以外の常不輕菩薩所對の増上慢も含む他の二乗は、いずれ成仏する事、③成仏する為には、一切衆生悉有仏性に相應する正因仏性の上に、更に發菩提心の緣因仏性を満す事、④五千の増上慢等が成仏できないのは、これらの二乗にも成仏可能な正因仏性があるにもかかわらず、法華經を信ぜず、緣因仏性である菩提心を發しようとしなからである事、⑤「從実相一法、出一切教」と、体より出生する用を総て仮りに肯定する為、相い矛盾する成仏説も不成仏説もともに認める事、⑥法華の会三帰一は道理、即ち正因仏性の点より論じ、一切は收入の対象となり、一切皆成仏説となる。しかし現実問題とし

て、衆生がこの道理を不聞不信の場合には收入の対象とならず、不成仏の教説も成立する事、⑦実相の一法より出生した用の一切の教は、因緣仮名方便であり、相対的なものである。勿論三乗や一乗の教説も実相の一边であり、絶対的なものではなく因緣の三乗一乗である。それを誤って絶対化し、一説に固執するが故に諍論となり、又不成仏の衆生が成立すると考える事、⑧無名相の実相の体より出生した名相の諸説は、総て方便であり、善巧・実益・由漸の働きがある。三乗一乗の方便のこの働きにより、声聞をも成仏へと誘引する法華經は、「衆經の王」である事、⑨忍位以上になると惡趣に對し非摂滅無為となり、成仏への道がなくなってしまう事、⑩大乘に比べ小乗は未究竟であるにもかかわらず、これを究竟であると退大為小の阿羅漢は思い込む。この阿羅漢に五濁の障害を無くさせ、一乗の機を熟させ、法華にて廻小入大させる事、⑪阿羅漢を未究竟であると云うのは、分段生死、四

住地煩惱のみを断じたにすぎず、変易生死、無明住地を未断尽なるが故である事、⑫ 釈迦滅後の二乗は、阿羅漢となつて三界外の浄土に生まれ、そこにて報身仏より法華經を聞き、一乘を信解し菩薩となる事、⑬ 法華經の教導の対象は、忍位以上の已定根声聞と、忍位前の不定根声聞である。その已定根の阿羅漢でも成仏出来るのは、曾て発した菩提心のある退大為小の声聞である事、又忍位前の不定根の本乗声聞が、釈迦より直接法華經を聞く機会を得るならば、阿羅漢となつても、三界外の浄土にて余仏より更に法華經を聞き、菩薩となる事等々である。

### 一 本乗声聞と決定声聞に関する補足

今までの論文中にて、吉蔵が五千の増上慢と決定声聞は不成仏であると主張する事を述べてきた。しかし、決定声聞も成仏すると云う文が見られる。

問、仏滅度後羅漢、凡有<sub>二</sub>幾人<sub>一</sub>。答、有<sub>二</sub>三種羅漢<sub>一</sub>。一有<sub>二</sub>大機<sub>一</sub>而未<sub>レ</sub>熟。故不<sub>レ</sub>值<sub>二</sub>仏聞法<sub>一</sub>。二無<sub>二</sub>大機<sub>一</sub>故、不<sub>レ</sub>值<sub>二</sub>人聞法<sub>一</sub>。故法華論有<sub>二</sub>三種声聞<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>大機者<sub>一</sub>、謂退大取小人。無<sub>二</sub>大機者<sub>一</sub>、是決定声聞。問、此二人同生<sub>二</sub>浄土<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>何異<sub>一</sub>耶。答、悟有<sub>二</sub>早晚<sub>一</sub>、根有<sub>二</sub>鈍利<sub>一</sub>。問、住<sub>二</sub>羅漢<sub>一</sub>、幾時而悟。答、楞伽云、至<sub>二</sub>無量億劫<sub>一</sub>、小乘空<sub>二</sub>三昧樂<sub>一</sub>、猶如<sub>二</sub>醉人久久方醒<sub>一</sub>。問、五千亦不<sub>レ</sub>聞不<sub>レ</sub>知、与<sub>二</sub>此人<sub>一</sub>何異。答、五千聞而不<sub>レ</sub>信。今明但不<sub>レ</sub>聞故不<sub>レ</sub>信。若聞即信、

故与<sub>二</sub>前異<sub>一</sub>。問、生<sub>二</sub>浄土中<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>大乘機<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>説<sub>二</sub>法華<sub>一</sub>。本乗声聞、生<sub>二</sub>於浄土<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>大乘機<sub>一</sub>、云何得<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>一乘<sub>一</sub>耶。一切無機聞<sub>レ</sub>教、悉作<sub>二</sub>此問<sub>一</sub>。答、有<sub>二</sub>二因縁<sub>一</sub>。一者仏性即是一乘。既本有<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>、即本有<sub>二</sub>一乘<sub>一</sub>、仏性力故還生<sub>二</sub>善根<sub>一</sub>、而是一乘種子還生<sub>二</sub>一乘善根<sub>一</sub>。二者如<sub>二</sub>涅槃云<sub>一</sub>、信心因<sub>二</sub>聴法<sub>一</sub>、聴法因<sub>二</sub>信心<sub>一</sub>。(法華統略、卷二、統蔵一輯第四三套第一冊三十丁右上)

即ち、釈迦滅後の阿羅漢には、有大機未熟の退大取小と、無大機の決定声聞とがあり、ともに仏より聞法する機会がない。しかし浄土に生じて、早い遅いがあるものの、いずれか成仏する。なぜならば、五千の増上慢が聞いても信じなかつたのに対し、この場合は不聞の故に不信なのであって、聞く機会があれば信ずるの相違があるためである。しかも無大機の本乗声聞が一乗を聞くのは、本有仏性と聴法の二因縁を備えているからである。

この法華統略の内容は、決定声聞も浄土に生じて法華經を聞き、成仏すると云う意味である。そうすると、今まで論じてきた決定声聞不成仏説と反する事になる。即ち、

法華論に依らば、声聞に記を授くるを積する中に四種の声聞あり。一には決定の声聞、二には増上慢の声聞、三には退菩提心の声聞、四には応化の声聞なり。二種の声聞には仏授記を与う。謂く、応化の声聞と及び菩提心を退して還つて菩提心を発せる者となり。決定と増上慢との二人は、根未だ熟せざるが故に仏授記を与えず。然して決定の声聞は小乗を保執し、増上慢の人は自ら究

竟と謂いて作仏を信ぜず。即ち記を与うるに堪えず。亦破執及び会歸の義に堪えず。(法華義疏、卷第八、授記品第六、大正蔵三四卷、五六六頁上)

と、法華論の前の文と同じ引用でありながら、応化と退菩提心の声聞が授記作仏し、決定と増上慢は、根未熟の故に授記作仏しないと説く。或は、「非<sub>下</sub>諸凡夫及決定声聞、本来未<sub>レ</sub>發<sub>二</sub>菩提心<sub>一</sub>者之所<sub>レ</sub>能得<sub>上</sub>故<sub>二</sub>」の法華論の文を釈して、

此二善根、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>成仏<sub>一</sub>。(法華論疏、卷下、統蔵一輯第七四套二冊、一八三頁右七)

と、凡夫と決定声聞の二善根は、不成仏と注釈する。

この相い反する相違は、法華義疏や法華論疏と、法華統略とで、吉蔵の思想に変化が生じた、と云うわけでもない様である。法華義疏や法華論疏のこの内容は、釈迦在世の現在世について述べているに對し、法華統略のこの内容は、釈迦滅後の三界外の浄土の内容について述べている様である。

又問題提起を受けて気付いたのであるが、決定声聞も、二つの場合を區別して考えるべきである。即ち既に述べたごとく、<sup>(4)</sup>

決定声聞者、即是本学<sub>二</sub>小乘行<sub>一</sub>、得<sub>レ</sub>証<sub>二</sub>四果<sub>一</sub>。故名<sub>二</sub>決定声聞<sub>一</sub>。(法華玄論、卷第七、大正蔵三四卷、四二二頁上)

と、本学小乗の中でも四果を得たもののみを決定声聞と云うのであって、阿羅漢等の四果を得ていない本乘声聞は、決定

声聞と呼ばない。そして、決定声聞には、忍位前の未定根の本乘声聞の時に、法華經の三車譬を聞いて阿羅漢になった声聞と、一方全く法華經を聞かずに阿羅漢になった本乘声聞の二つの場合を區別して考える事である。後の場合の法華經と全く無縁のまま阿羅漢となってしまう決定声聞は、不成仏である。そして前の場合の未定根の時に法華經を聞く機会を得て、阿羅漢になった声聞は、成仏する事となる。この法華經と有縁の声聞が、今まで本乘声聞、發軔学小聲聞と稱して論述していたものである。そしてこの声聞が、釈迦滅後三界外の浄土に阿羅漢となって生じたものを、法華統略中では、決定声聞と呼んでいると解釈すれば、全体の意味がとおる。そもそも譬喩品の三車喩は、本学小乗を三界外の浄土に生じさせるためのものである。

三車、為<sub>レ</sub>發軔学小人、令<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>三界<sub>一</sub>当得<sub>二</sub>三乘<sub>上</sub>。(法華玄論、卷第七、大正蔵三四卷、四二三頁上)

或は、

本乘の聲聞の爲には、直ちに現在の法門を説く。謂く、現在に三乗の根性あつて三界火宅の中に在り。權に三車を説いて、引いて出づることを得せしむ。既に宅を出づることを得れば、更に種種の方便を以て其の心を調伏し、小志漸く移り大根稍熟せしめて、然る後に爲に仏慧を説き初めて信心を起さしむ。上の法譬の二周には多く斯の意を明す。謂く、本乘の聲聞を化するなり。(法華

義疏、卷第八、化城喻品第七、大正蔵三四卷、五六八頁上—中）と、三車の喩は、本乗声聞（発軫学小声聞）を三界より三界外に導き、阿羅漢とするものである。そうすれば方便を駆使して阿羅漢の心を調伏し、大機を熟さしめて廻小入大の菩薩にと導けるのである。本乗の声聞と退菩提心の声聞の相違について次の様に述べている。

問う、二人何か異なる。答う、本乗の声聞は昔大乘を聞かず、未だ菩提心を発せず、一乗の種子なし。無余に入りて後、仏に値い経を聞いて方に乃ち菩提心を発す。退菩提心の声聞は、昔曾て一乗を聞き菩提心を発して一乗の種子あり。但し中途に大乘を退して小を取る。現在に一乗経を聞き、続いて菩提心を発し、自ら作仏を知る。故に二人異なると為す。（勝鬘宝窟、卷下之本、大正蔵三七卷、六〇頁上）

即ち、退菩提心の声聞には、曾て一乗を聞き菩提心を発した一乗の種子があるから、現在、法華の一乗を聞いても菩提心を発して成仏を知る事ができる。それに対し本乗の声聞には、未だ曾て菩提心を発したことがない為、中道一乗の種子が全くない。この為現在法華経を聞いても直ちに菩提心を発することができない。そこで未来無余涅槃に入った後、そこで仏に再び会い法華経を聞いて菩提心を発し作仏を知る事となる。ここで云う無余に入りて後とは、

問う、愚法の人、何れの時に不愚なるを得るや。答う、愚法の人

は、未来無余涅槃の後、心想生ずる時、仏に値い法華を説くを聞いて、方に法に於て不愚なるを得。故に法華の化城品に云く、我が滅度の後、復弟子あり、是の経を聞かず、自ら所得に於て滅度の想を生ず、我れ余国に於て仏と作り、為に是の経を説いて仏慧に入ることを得しむと。（前同、大正蔵三七卷、五九頁下）<sup>(5)</sup>とある事から、三界外の浄土の事と同じと考えられる。又菩提心を発した一乗の種子の不滅に関して、

汝等が所行は是れ菩薩の道なりとは、昔は大因を説いて小果となしき。今は小果を指して大因となす。故に二乗の果は是れ菩薩の道なり。法華論に無上の義を明すに十種あり。一には種子無上を示現するが故に、雲雨の譬喩を説く。汝等の所行は是れ菩薩の道なりとは、謂く、菩提心を発して退し已って還発す。前に修行せし所の善根滅せず。同じく後に果を得るが故にと。此の意は、本の菩提心滅せざるが故に此の善根は即ち無上の種子なりと明す。此の種子に由るが故に、今法華を聞くは即ち是れ雲雨の後に成仏を得るなり。問う、若し爾らば、決定の声聞の善根は応に菩薩の道に非ざるべきや。答う、決定の人は即ち是れ教を守って小果を封執すれば、即ち破を被って会せず。若し転じて悟れば、即ち会して而も破せざるなり。（法華義疏、卷第八、藥草喻品第五、大正蔵三四卷、五六五頁中）

と、退菩提心の声聞の曾ての一乗の種子は滅しない。滅しないが故に、三乗の果が大乗の因にと続くのであり、「汝等所行、是菩薩道<sup>(6)</sup>」と云うのである。この退菩提心の声聞に対し

決定声聞の場合には、小果を封執するため会三帰一の対象外の者となる。しかし若し転じるならば廻小入大する者もありうると云う。この会三帰一される可能性のある決定声聞が、どの様な決定声聞かは別にしても、「汝等所行是菩薩道」の注釈からして、発菩提心の一乗の種子がなければならぬ。つまりスタート時点から小乗のみを学び続けた本乗声聞は、未定根性の時に、法華経を聞いておかないと、決定声聞になつて成仏への道に入れない事となる。

又既に論述したごとく吉蔵が、実相の一法より出生した諸説を、方便として総て認めるならば、論理的要請により、成仏説も不成仏説も主張しなければならぬ事を論じた。その一番良い一例として、

今略して四句を論ぜん。一には縁覚の果人、既に仏に値わず。三界の外に於いて法華経を聞いて、三を廻して一に入る。二には縁覚の因人、及び声聞の三果、三界の内<sup>(7)</sup>に於いて法華経を聞いて、小を廻して大に入る。三には羅漢の人、若し仏に値うものは、法華経を聞いて界内に道に入る。若し仏に値わざるものは、三界の外に生じて法華経を聞いて方に一乗を受く。四には増上慢の二乗、小を保つて大を拒めば、界の内<sup>(8)</sup>外に於いて並びに一乗に入らず。(中観論疏、卷第八末、法品第十八、大正蔵四二卷、一二八頁中)

と、三界外と三界内と三界の内外との三つの場合によつて廻

小入大する二乗がいる反面、三界の内外にても廻小入大できない増上慢の二乗がいることである。三界の内でも、又三界の外でも、小乗を保つて大乘を拒み一乗に入ろうとしない増上慢がいると云うことは、永久に成仏しない二乗を認めると云う事である。観無量寿経義疏中にも、

(前略) 十悪四重五逆並得<sup>レ</sup>生<sup>ニ</sup>西方<sup>一</sup>、若是謗法闡提不得<sup>レ</sup>生也。

所以謗法闡提不得<sup>レ</sup>生者、闡提不得<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>法。臨<sup>レ</sup>終、雖<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>説<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>無量寿<sup>一</sup>、彼終不得<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>故、不得<sup>レ</sup>往<sup>ニ</sup>生<sup>一</sup>。又謗法亦爾、如<sup>ニ</sup>小乘人<sup>一</sup>、聞<sup>レ</sup>説<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>十方<sup>一</sup>、不得<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>故、不得<sup>レ</sup>往<sup>ニ</sup>生<sup>一</sup>也。(続蔵一輯第三二套四冊三三九頁左上―中)

と、法を信じない謗法と闡提は、西方の浄土に往生できないと吉蔵は、ここでも論述している。

繰り返すことになるが不成仏に関して、吉蔵の論理からいって、不成仏者を認めなければならない事、更に不成仏者を認める文が現に存在する事である。しかも小を保つて大を拒み、一乗を不聞不信の者のみを不成仏とするのであって、一乗を聞信するものも不成仏者とするのではない。もし一乗を信じようとしぬ者までも成仏すると認めるならば、一乗の因なくして一乗の果を得ることになり、延いては修行努力を否定する事になってしまう。吉蔵はこの様な無因有果を認めるわけには、勿論できない。そこで、既に論じたごとく、忍法前の不定根の本乗声聞の時に、法華経の三車の喩を

聞く。そして三界外の浄土に阿羅漢となって生じて未だ大機が無くとも、法華経を聞いた種子は残っている。この残っている種子に対し、「更に種類の方便を以て其の心を調伏し、小志漸く移り大根稍熟せしめて、然る後に為に仏慧を説き初めて信心を起さしむ」と、本乗声聞の三界外の教導を述べるのである、と解釈すればと考える。

議論を最初の法華統略の文にもどすならば、法華統略の云うこの決定声聞と云うのは、実は本乗声聞のことである。しかも本乗声聞と云っても、忍位前の不定根の時に法華経を聞いた声聞で、三界外の浄土に阿羅漢となって生まれたものである。又本乗声聞のうち、阿羅漢になったものを決定声聞と呼ぶから、この場合決定声聞と定義してもなんら差し支えがない。この様に法華統略のこの文を解釈すればよいと考える。そうするならば、吉蔵の他の疏の内容と、この法華統略の内容も総て意味が通じる。

しかしこれに反して、終始一貫し小乗のみに専修し、一乗の教えに全く無縁のまま阿羅漢となってしまうといわゆる決定声聞と考えると、吉蔵の考えが、理解できなくなってくる点が生ずる。即ち、忍法以上の已定根声聞の法華経の陶練の対象が、退大為小の声聞のみである事に反する、又無因有果を認めてしまうことになってしまふ事、或は論理上不合理であったり、現にある不成仏の文をどの様に解釈するか、又漸

修し漸捨しつづけ、修行する意味をも否定する事になる。

## 二 正因・縁因仏性に関する補足

法華経を聞くと云うことは、縁因仏性、即ち菩提心を発することである。吉蔵は仏性について、次の様に説いている。

如来蔵、煩惱の中に在るを如来蔵と名く。如来蔵は即ち是れ仏性なり。仏性に三あり。一には自性住仏性、二には引出仏性、三には至得仏性なり。引出仏性は、初発意より金剛心に至る。此の中の仏性を名けて引出と為す。(勝鬘宝窟、卷下之本、大正蔵三七卷、六七頁中)

即ち、自性住仏性と引出仏性と至得仏性の三つの仏性である。その内、第三番目は、「諸仏の三身即ち是れ至得仏性なり」とあることから、仏果を得た諸仏の仏性を云う。又前の二つの仏性に対しては、

問、前云下得決定心<sub>中</sub>故与<sub>中</sub>受記<sub>上</sub>、後明下依<sub>中</sub>仏性平等<sub>中</sub>故与<sub>中</sub>受記<sub>上</sub>。

此二何異。答、前是縁因、後是正因。又前是引出仏性、後是自性住<sub>中</sub>仏性、所以為<sub>中</sub>異。(法華論疏、卷下、続蔵一輯第七四套第二冊、一八八頁右上)

と、決定心を得させる為の受記を説くのは、縁因仏性、即ち引出仏性があるからである。又衆生には皆平等に仏性があるが故に受記するのは、正因仏性、即ち自性住仏性があるからである。吉蔵は、因位の点から、正因と縁因の仏性、或は自

から仏性を本来備えていると云う意味の自性住仏性と、この自性住仏性を引き出す引出仏性の呼称を使用す。

そこで最初に、正因仏性、即ち自性住仏性について補足論述する。先に「如来蔵は即ち是れ仏性なり」と云う文を引用したが、その如来蔵について吉蔵は、「如来蔵に由って顛倒成ず」と云う面と、「不顛倒は蔵に由って成ず」と云う面の二つを説いている。その内不顛倒について次の様に述べる。

不顛倒は蔵に由って成ずと言うは、若し仏性なければ大行大願を起すと雖も、成仏することを得ず。龍樹の云うが如し。鉄に金性なければ、復鍛煉すと雖も、終に金と成らずと。要す本、仏性有るに由って、然して後に大行大願を起し、然して後に成仏す。龍樹の云うが如し、黄白の石に金銀の性あるが如し、人功鑪冶するに由るが故に金銀ありと。故に不顛倒の法は蔵に由って成ず。  
(勝鬘宝窟、卷下之本、大正蔵三七卷、六七頁上)

即ち、本来仏性がなければ、成仏する事は不可能である。それはあたかも、金を含まぬ鉄は、どうやっても金にはならないのと同じである。逆に金銀を含む鋳石を冶金するが故に、金銀は得られるのである。これと同じで、本来仏性、即ち正因仏性・自性住仏性があるから成仏できるのであって、無は決して有にならないのである。吉蔵は、ここで引用する中論の文を次の様に注釈している。

復た勤めて精進(し菩提道を修行)すと雖も、という下は、第二

吉蔵の成仏不成仏観(十)(末光)

に因果を破す。明かさく、汝凡夫は因を修して仏果を得と謂つて、凡夫の時は未だ仏あらず、仏の時は復た凡夫なし。若し凡夫の時定んで仏なしといわば、復た勤修すと雖も終に仏を得ざるべし。不得は定んで得ず、無仏は定んで無仏なるを以て、終に仏と為ることを得ざるなり。又、此れは是れ大乘を用いて小乗の義を破す。大乘は、一切衆生皆な仏性あって並びに皆な成仏すと明かす。小乗人は、一切衆生皆な仏性ありと明かさず。若し爾らば既に仏性なし。復た修行すと雖も終に仏と成らじ。(中観論疏、卷第十本、四諦品、第二四、大正蔵四二卷、一五三頁中―下)

即ち、小乗では、凡夫の時は仏性がなく、逆に仏となった時は、凡夫の性がないと説く。もしそうならば、いくら努力しても、無仏は決定して無仏なのだから、結局は、成仏不可能となってしまう。これに対し大乘では、一切衆生皆有仏性であるから、皆な成仏することができる。と吉蔵は説く。或は、

問う、小乗人も亦た云わく、一切衆生に三乗の性あり、忍法の時に至って余の二性は非数縁滅す。故に三乗の中に随って一乗を成ず。云何んぞ仏性を明かさずと言うや。答う、大乘の中には唯し仏性のみあって余性あることなし。故に成仏することを得と明かす。小乗には唯し仏性のみありと明かさず。則ち大乘の仏性の義を破するになんぬ。既に大乘の仏性なし、云何んぞ成仏せんや。

(前同、大正蔵四二卷、一五三頁下)

と、小乗でも、三乗の性あると認めるものの、忍法以上にな

ると二乗は非摂滅無為となつてしまい、結局一乗のみが成立するから、小乗でも仏性を説いていると主張する。これに対し大乘は、仏性のみあつて余性なしと、有仏性を説くが故に皆成仏説となるのである。即ち、大乘の皆有仏性説と異なり、小乗は唯有仏性を説かないが故に、成仏の義が不成立と主張する。

以上、大乘では一切衆生悉有仏性を説くが故に、成仏することができる。これが吉蔵の云う、正因仏性であり、自性住仏性である。

しかし、一切衆生悉有仏性と云う正因仏性がだれにでもあったとしても、これを引出す縁因仏性がなければならぬ。これが第二番目の仏性であり、これらの関係を、

凡有<sub>二</sub>義、一者仮<sub>レ</sub>縁、二有<sub>二</sub>種子。衆生成仏亦具<sub>二</sub>兩義。一者縁因<sub>レ</sub>仏性、二本有<sub>レ</sub>仏性。所<sub>レ</sub>言縁因<sub>レ</sub>仏性者、即是菩提心。由<sub>レ</sub>菩提心、方得<sub>二</sub>成仏。是故<sub>レ</sub>經云、諸仏兩足尊、知<sub>レ</sub>法常無性、仏種從<sub>レ</sub>縁起、是故<sub>レ</sub>說<sub>二</sub>一乘。二本有<sub>レ</sub>種子、即是本有<sub>レ</sub>仏性、方得<sub>二</sub>成仏。雖<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>菩提心、若本無<sub>レ</sub>仏性、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>成仏。故<sub>レ</sub>經云、是法住<sub>レ</sub>法位、世間相常住、於<sub>レ</sub>道場<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>已、導師方便<sub>レ</sub>說。即是本有<sub>レ</sub>常住<sub>レ</sub>仏性也。故知此經具明<sub>二</sub>緣正<sub>レ</sub>兩<sub>レ</sub>仏性。〔法華統略、卷一・統蔵一輯第四三套第一冊、三頁右上—中〕

と、縁因仏性とは菩提心のことで、菩提心を発して成仏できるのは、元来、本有種子即ち正因仏性があるからにほかなら

ないのである。衆生の成仏には、この二つの仏性が必要となる。<sup>(11)</sup>この中の第二番目の縁因仏性について、

仏種者、菩提心、為<sub>二</sub>仏種子。故華嚴<sub>レ</sub>弥勒、百句歎<sub>レ</sub>菩提心、命初即云、菩提是<sub>レ</sub>仏種子、三世諸<sub>レ</sub>仏、由<sub>レ</sub>菩提心<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>正<sub>レ</sub>覺<sub>レ</sub>故。但菩提心、要藉<sub>レ</sub>縁而<sub>レ</sub>發、即一乘之<sub>レ</sub>教。以下<sub>レ</sub>道理唯有<sub>二</sub>仏乘、無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>余乘、衆生既聞<sub>二</sub>此言、則不<sub>レ</sub>發<sub>二</sub>余心、但發<sub>二</sub>仏心<sub>レ</sub>也。〔法華統略、卷二、統蔵一輯第四三套第一冊、三四頁右上—中〕

と、菩提心は仏の種子であり、三世諸仏も菩提心を発して正覚になった。しかもこの菩提心は縁を借りて起こるもので、その縁と云うのが、法華の一乗の教えである。即ち法華の道理として唯一仏乗のみあつて、余乗がないと云うこの教えを聞かざらば、衆生は余乗に向う心をなくし、但成仏への心を起こす。即ち菩提心を発すると云うのである。つまり、衆生には唯仏性のみあつて余性がないと云う正因仏性の前提があつても、この事を聞いて信じて実行することがなければ、成仏できない。この法華經の有一無二の教の縁を借りて菩提心が生ずるのであり、これが縁因仏性である。

しかもこの菩提心は、

問曰、何故云、知法常無性。答、釈<sub>レ</sub>說<sub>二</sub>一乘<sub>レ</sub>意、若菩提心、有<sub>二</sub>自性、則本來<sub>レ</sub>已有。不<sub>レ</sub>藉<sub>二</sub>於縁、不<sub>レ</sub>須<sub>レ</sub>說<sub>二</sub>一乘。以<sub>レ</sub>菩提心無<sub>レ</sub>自性。假<sub>レ</sub>縁而<sub>レ</sub>發。故須<sub>レ</sub>說<sub>二</sub>一乘<sub>レ</sub>也。〔前同頁、右上〕

と、無自性と説く。もし菩提心が有自性であるならば、既に

有るのであるから、なにも一乗教を聞くという縁を借りる必要はないわけである。ところが菩提心は、無自性なるが故に、一乗の教と云う縁を借りて、菩提心が生ずると考える。

しかしこれに反して、法華経を誹謗して聞かない者は、即断一切世間仏種者、菩提心正是仏種。此経明<sub>レ</sub>有一無二<sub>レ</sub>、故不<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>余心<sub>一</sub>。有一故唯發<sub>レ</sub>仏心<sub>一</sub>、則此経是菩提心本。若謗<sub>レ</sub>此経<sub>一</sub>、則菩薩種不<sub>レ</sub>生、名<sub>レ</sub>断<sub>レ</sub>仏種<sub>一</sub>。(法華統略、卷四、統蔵一輯第四三套第一冊、五三頁左下)

と、仏種を断ずるが故に菩薩に向うことができない。即ち有一無二と云う一乗の教を縁として、無自性なる菩提心が発せられる。しかし菩提心を発しようにも、一乗の教を誹謗し不聞の場合には、縁を欠き菩提心は不生となり、不成仏者も生ずる事となる。この為に、法華論の「非<sub>レ</sub>諸凡夫及決定声聞本来未<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>菩提心<sub>一</sub>者之所<sub>レ</sub>能得<sub>上</sub>。如是乃至小低頭等皆亦如<sub>レ</sub>是。」の文に対し吉蔵は、

此二善根不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>成仏<sub>一</sub>。(法華論疏、卷中、統蔵第一輯第七四套第二冊、一八三頁右上)

と、凡夫と決定声聞の二人は不得成仏と断定する。又更に法華論では、凡夫や決定声聞の善の行為のみならず、小低頭等の善の行為も、菩薩行とならず、不成仏と主張している。この文に対しても吉蔵は、

問曰、経言<sub>レ</sub>一切善根皆成仏<sub>一</sub>、云何但言<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>菩提心<sub>一</sub>善方成仏<sub>上</sub>耶。

吉蔵の成仏不成仏觀(十)(末光)

答、仏意雖<sub>レ</sub>修<sub>レ</sub>一切善、要須<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>菩提心<sub>一</sub>也。又仮<sub>レ</sub>一切善、為<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>菩提心<sub>一</sub>因縁<sub>上</sub>耳。終須<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>菩提心<sub>一</sub>也。菩提心者、是仏心、發<sub>レ</sub>仏心<sub>一</sub>方得<sub>レ</sub>成仏<sub>一</sub>也。(前同頁)

と、小低頭等の善根の行為でも、法華経は皆成仏と云っているのに、どうして發菩提心の善のみが成仏と云うのか、と問う。それは、仏が一切善を修行することをすすめるものの、最後には必ず菩提心を発すると云う要件を満たさなければ成仏できない。又一切の善は、菩提心を発する因縁とはなるものの、結局は菩提心を発しなければ、成仏できない。即ち小低頭等の善は、發菩提心の遠縁<sup>(12)</sup>とはなるが、縁因仏性そのものではなく、發菩提心そのものの縁にはならない、と云う事である。

この菩提心は、有一無二と云う法華経の一乗の教を聞いて、初めて発するものである。しかし法華経の有一無二と云う教えは、五濁の障害等<sup>(13)</sup>により、難信難解であって、この教えは誹謗され又信じられにくいものである。自らの信ずる教えに固執し、自らの現状を拘泥し、法華の一乗思想に対し、聞く耳を持たない者がいると吉蔵は考える。その不聞不信のものが、五千の増上増であり、又忍位前に全く法華一乗思想に会えずにそのまま阿羅漢となってしまう決定声聞であって、菩提心の縁に欠けるが故に不成仏だと主張するのである。

## 三 方便に関する補足

吉蔵は、成仏の論理的説明として、出生と収入で説くことを既に論じた。その出生には、「從<sub>レ</sub>得生<sub>レ</sub>失」と云う失の一面がある。

出生失者、謂失<sub>二</sub>一道清淨<sub>一</sub>、故有<sub>二</sub>六道不同<sub>一</sub>。故無量義經云、一切諸法、猶如<sub>二</sub>虛空<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>三相<sub>一</sub>、而諸衆生虛妄橫計、輪<sub>二</sub>廻六趣<sub>一</sub>、莫<sub>二</sub>能自出<sub>一</sub>。如<sub>二</sub>涅槃云<sub>一</sub>、是一味藥、隨<sub>二</sub>其流処<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>六種味<sub>一</sub>。（法華統略、卷一、統蔵一輯第四三套第一冊、七頁左上）

即ち、本来一道清淨なるものを、衆生の虚妄横計により、六道の異なるものに出生してしまふ。しかし

然雖<sub>二</sub>通明<sub>三</sub>三種出生三種收入<sub>一</sub>、正為<sub>二</sub>三乘人<sub>一</sub>。明<sub>二</sub>三從<sub>レ</sub>一生<sub>一</sub>、寧不<sub>レ</sub>歸<sub>レ</sub>一。（前同、七頁左下）

と、三種の収入出生を説くものの、これは三乗の人の為のものであり、三乗は本来一乗より生じたものである事を説き明かせば、必ず本来の一乗に収入される、と説く。

この「明<sub>二</sub>三從<sub>レ</sub>一生<sub>一</sub>」、即ち今までの言葉で云えば、有一無二等と云う一乗の教えを聞く事により、菩提心が発せられた。吉蔵はこの菩提心を、

釈<sub>二</sub>生育甚難<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>發<sub>二</sub>菩提心<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>生、令<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>菩薩行<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>育。菩提心是中道心。而衆生多起<sub>二</sub>有無見<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>中道正觀<sub>一</sub>。是以云<sub>レ</sub>難也。（法華統略、卷三、統蔵第一輯第四三套第一冊、五一頁左上）

或は、

非有非無、名けて中道と為す。是の故に經に云く、仏性を名けて中道の種子と為す。中道の法、之を名けて仏と為す。中道を説くが故に大法師と名くと。此の三種の中道、必ず次第あり。仏性、本是れ中道なるに由つて、中道未だ現ぜざるを種子と名く。中道顯現する、之を目けて仏と為す。（勝鬘寶窟、卷上之末、大正蔵三七卷、十四頁下）

と、菩提心とは中道心で、有と無の二見を離れる事と考える。又發菩提心の有無の二見を離れた中道心が、未現の状態を種子と名づけ、これが顯現したのを仏と云う。故に、

菩薩行、遠離<sub>二</sub>二辺<sub>一</sub>、是中道行故。（法華論疏、卷上、統蔵第一輯第七四套第二冊、一六四頁左上）

と、菩薩の行は、二辺を遠離する中道の行であり、中道の種子を顯現する行である。しかし現実問題として、三乗と一乗の二辺を遠離した中道の發菩提心を行ずる事は、大變困難な事である。

然る所以は、衆生には多く凡夫二乗の善根のみあって、中道正觀の種子を修するは少し。故に仏の一乗を説きたもうをば感ぜざるなり。（法華義疏、卷第四、大正蔵三四卷、五一〇頁下）

即ち、衆生には、凡夫や二乗の善根のみあって、非三非一の中道正觀の一乗の種子を修する菩薩行は、少ないのである。この凡夫や二乗の善根のみしかない者に対して、直ちに

中道無所得の教を説いても無益となる。即ち、

聞<sub>レ</sub>大乘<sub>法</sub>取<sub>レ</sub>非大乘<sub>者</sub>、此人本学<sub>レ</sub>大乘、但作<sub>レ</sub>有所得<sub>学</sub>。故聞<sub>レ</sub>説<sub>レ</sub>大乘、退<sub>レ</sub>大取<sub>レ</sub>小果。如<sub>レ</sub>大品中有<sub>レ</sub>大鳥之譬、初生無<sub>レ</sub>翅鳥子、未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>兩翅、而学<sub>レ</sub>飛、故遂便墮落。有所得人、雖<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>大心大行、無<sub>レ</sub>慧方便、聞<sub>レ</sub>説<sub>レ</sub>大乘、退取<sub>レ</sub>小果。故大品中六十菩薩聞<sub>レ</sub>説<sub>レ</sub>波若、成<sub>レ</sub>阿羅漢。(法華論疏、卷下、統藏第一輯第七四套第二冊、一八六頁右上)

と、無所得中道によらずして、有無の二見による有所得の不行大願を發しても、慧の方便を欠くが故に、かえって菩薩を退して阿羅漢になってしまう。それはあたかも、大鳥の子が、まだ兩翼が完全に成長していないにもかかわらず飛べば、高い巢から地上に落ちてしまう様なものである。この為に吉蔵は、中道の菩提心を發せさせる事ができる様に、方便と云う手段を肯定する。

又理に拠つて明さば、道門は未だ曾て三一にあらず。三と説き一と説くは皆是れ方便なり。即ち是れ無名相中に強いて名相をもつて説く。(法華義疏、卷第六、譬喻品、大正蔵三四卷、五三八頁下)

即ち、道理より云えば、三乗とか一乗とかと云い表わすことのできないものを、三乗とか一乗とかと云い表わすのは方便であつて、仮名相である。しかもそれは、縁の相違によるもので、この理と縁に関して吉蔵は、次の様に藥草喩品の注

釈をしている。

至理無二なること一地一雨の如し。五乘に於て得益不同なるは草木の差別の如きなり。(法華義疏、卷第八、大正蔵三四卷、五六〇頁上)

或は、

雖<sub>レ</sub>地雨は一、於<sub>レ</sub>草木<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>差。隨<sub>レ</sub>草木成<sub>レ</sub>差、雖<sub>レ</sub>理は一、隨<sub>レ</sub>縁成<sub>レ</sub>三、於<sub>レ</sub>縁成<sub>レ</sub>三也。(法華論疏、卷下、統藏第一輯第七四套第二冊、一八五頁左上)

即ち、藥草喩品の喩のごとく、同一条件の土地に同一の雨が降つても、草木の相違により、成長に差別が生ずる。これと同じ様に、本来非三非一の中道の法であるものを、縁の差別に随つて三乗の方便の教を以て説く。この様に吉蔵が云うのは、方便を得益の肯定の面でとらえているからである。

三者、蓮華雖<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>濁水、而不<sub>レ</sub>捨<sub>レ</sub>泥水。今亦爾、雖<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>衆生出<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>二乘<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>仏、常作<sub>レ</sub>三乘<sub>レ</sub>方便。教<sub>レ</sub>化<sub>レ</sub>衆生亦如<sub>レ</sub>藥草喩品明<sub>レ</sub>、理雖<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>二、隨<sub>レ</sub>縁説<sub>レ</sub>二、乃於<sub>レ</sub>縁有<sub>レ</sub>二。(法華論疏、卷上、統藏第一輯第七四套第二冊、一五九頁左上)

即ち、蓮華の花が泥水を出離すると云つても、しかも泥水と不分離のごとく、又二乗を出離して成仏するにしても、二乗の方便に依らざるを得ないのと同じである。衆生の教化は、藥草喩品のごとく、無二のものを縁に随つて二と説く方便の教の力をかりる必要がある。この藥草喩品の役割は、三

乗の方便を否定する菩薩の誤った考えを正す為に、説くものと考える。

次に法華論に依って此の品の来意を明さば、火宅の譬は凡夫の病を破し、窮子の譬は二乗の病を破し、雲雨の譬は菩薩の病を破す。菩薩の人は上来所説の唯一乗というを聞いて、便ち畢竟して復三乗の方便なしと謂えり。此は即ち実を得て権を失し、体を存して用を忘る。然も権を識れば方に乃ち実を悟り、用に達すれば乃ち体を鑑む。既に権を識らざれば亦実を悟らず、即ち権実俱に喪い、体用並びに亡じぬ。此の病を治せんが為の故に、一地の所生、一雨の所潤なりと雖も、而も諸の草木各々差別ありと明す。至理は無二なりと雖も、而も縁に於て五あり。故に権実の義成じ、体用方に顯わる。（法華義疏、卷第八、藥草喻品第五、大正蔵三四卷、五五八頁中）

これによるならば、火宅の譬は凡夫の病を破し、窮子の譬は二乗の病を破し、藥草喻品の雨雲の譬は菩薩の病を破す。菩薩の病とは、唯一乗の説のみ認め、三乗方便の働きを完全に否定してしまふ事である。しかしこれでは、一乗の実のみを得て、三乗方便の権を失ってしまう。権を識らなければ、実を悟ることができない。つまり現実に三乗の差別のある衆生を、三乗の方便の教なくしては、一乗に導く事ができないと主張する。三乗方便の教、権の働きを否定し、一乗の実のみを肯定する菩薩の病を治する為に、雨雲の譬は説かれる。

この理と方便の教、権と実、体と用の關係に迷ったのが瑠法師である。<sup>(15)</sup>

答う、瑠法師の注に云く、已に同歸の理を見る。但理を以て教を疑い、教を以て理を疑う、互に推すが所以に疑を生ず。理に順じて教を推せば、応に三なるべからず。教に就いて理を言えば、応に一なるべからず。故に理教の間に廻惶すと。（法華義疏、卷第五、譬喻品第三、大正蔵三四卷、五一五頁上）

即ち、理の立場になつて考えるならば、理は無二なるが故に、三乗の教は成立しない。逆に教の立場に立つならば、理の無二は成立しない。しかも同歸と云う。この様に瑠法師は考えた為に、理と教の間を堂堂巡りの思考をすることになつてしまった。

これに対し吉蔵は、理と教の相即を説く。

一地の所生、一雨の所潤とは、至理二なきが故に五乗を合して以て一に歸するに喩うるなり。而も諸の草木各差別ありとは、謂く、五乗の根性に随つて五種の教門を説く。謂く開の義なり。若し但開のみにして合せずんば、則ち教を得て理を失わん。若し但合のみにして開せずんば、則ち理を得て教を忘れん。故に今明す、開すと雖も而も合し、合すと雖も而も開す。合すと雖も而も開なれば、一にして而も常に五あり。開すと雖も而も合なれば、五にして而も常に一なり。具に開合を識れば、理教始めて成ず。是を以て此の品には一化の開合の義を釈成するなり。然も開すと雖も而も合なれば、合をば開の合と名け、合すと雖も而も開なれ

ば、開をば合の開と名く。合の開は即ち開に非ず、開の合は即ち合に非ず。故に開に非ず合に非ず、五に非ず一に非ざれども、強いて開合となす。(法華義疏、卷第八、藥草喻品第五、大正蔵三四卷、五五八頁上—中)

即ち、五乗の根性に随って五種の差別の開の教と、無差別の合の理とが、「開すと雖も而も合し、合すと雖も而も開す。」と説くごとく、理と教が関連した相即関係のものと主張する。吉蔵がこの様に主張するのは、もし理と教が全く無関係で断絶しているものであるならば、いくら教を説いても、吉蔵の云う理を得ることができないことになる。吉蔵の云う理とは、非三非一の中道無所得のことで、これが顕現したのが仏である。中道無所得を顕現し仏に成ろうとするのが菩薩である。その菩薩の行とは、三乗とか一乗とかの二辺に固執し、かたよることを遠離する中道の行である。この菩薩の中道の行に導く為には、三乗とか一乗の方便の教を用いて得られるものである。たとえ中道無所得の仏になる事が、極めて困難な事で三阿僧祇劫かろうとも、三乗の教によって一乗に廻小入大し、最後には成仏できなければ、三乗の教の意味を失う。この様に吉蔵は考えるが故に、理と教の相即を説くと思う。又現に在る五乗や三乗の差別の衆生の縁を救う為に、三乗の教等は否定しなければならぬものながら、三乗の教は、成仏への得益の手段なるが故に、吉蔵は方便として

の面では肯定する。

今回の論文は、今までの補足説明となり、重複する内容も多分になってしまった。

振り返って見るに、最初の論文の目的とだんだん異なってしまう、あるいは題名を変えて論ずればよかったのかと云う思いもある。

又種々の御批判御指導の御蔭で、ここまで考える事ができた事を深く感謝するしだいです。

#### 註

- (1) 「吉蔵の成仏不成仏観」(駒沢大学仏教学部研究紀要、第四十五号、昭和六十二年三月)、「吉蔵の成仏不成仏観(二)」(駒沢大学仏教学部論集、第十八号、昭和六十二年十月)、「吉蔵の成仏不成仏観(三)」(駒沢大学仏教学部研究紀要、第四十六号、昭和六十三年三月)、「吉蔵の成仏不成仏観(四)」(駒沢大学仏教学部論集、第十九号、昭和六十三年十月)、「吉蔵の成仏不成仏観(五)」(駒沢大学仏教学部論集、第二十号、平成元年十月)、「吉蔵の成仏不成仏観(六)」(駒沢大学仏教学部研究紀要、第四十八号、平成二年三月)、「吉蔵の成仏不成仏観(七)」(駒沢大学仏教学部論集、第二十一号、平成二年十月)、「吉蔵の成仏不成仏観(八)」(駒沢大学仏教学部研究紀要、第四十九号、平成三年三月)、「吉蔵の成仏不成仏観(九)」(駒沢大学仏教学部論集、第二十二号、平成三年十月)。
- (2) 大正蔵二六卷、七頁下—八頁上。

- (3) 奥野光賢「三論宗における声聞成仏について―珍海の見たる吉蔵の声聞成仏観―」(印度学仏教学研究、第三十八卷第二号、平成二年三月、二一八頁―二二二頁)参照。
- (4) 註1「吉蔵の成仏不成仏観(九)」(三〇八頁等参照)。
- (5) 註1「吉蔵の成仏不成仏観(九)」(一、仏滅後の阿羅漢成仏は三界外の浄土にて、三〇一頁―三〇四頁参照)。
- (6) 法華経、卷第三、藥草喻品第五、大正蔵九卷、二十頁中。
- (7) 註1「吉蔵の成仏不成仏観(九)」(四、已定根声聞と不定根声聞、三〇九頁―三一頁参照)。
- (8) 註1「吉蔵の成仏不成仏観(四)」(三、吉蔵が不成仏を主張する理由、三二四頁―三二八頁参照)。
- (9) 法華義疏、卷第八、化城喻品第七、大正蔵三四卷、五六八頁上。
- (10) 宝窟 卷下之本 大正蔵三七卷、六七頁中、又仏性論、卷第二、大正蔵三一卷、七九四頁上参照。
- (11) 拙論「吉蔵の一大事因縁について」(三、一乗教則是発菩提心縁也、駒沢大学仏教学部論集第十七号、昭和六一年十月、三二〇頁―三二三頁参照)。
- (12) 註1「吉蔵の成仏不成仏観(三)」(三、人天の成仏、二三五頁―二三八頁参照)。
- (13) 註1「吉蔵の成仏不成仏観(八)」(三、大機の未熟と五濁について、一一三頁―一一七頁等参照)。
- (14) 註1「吉蔵の成仏不成仏観(六)」(三、方便の善巧・実益の意味、九八頁―一〇〇頁参照)。
- (15) これらの事に関しては、平井俊榮著『中国般若思想史研究』「第二節 吉蔵教学の基礎範疇、一理教と体用の概念」四一九頁以下等参照。